

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 2 日現在

機関番号：35405

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520304

研究課題名（和文）アメリカ格差社会とアフリカ系アメリカ人のサブカルチャー

研究課題名（英文）America's Stratified Society and African-American Subculture

研究代表者

森 あおい (MORI AOI)

広島女学院大学・文学部・教授

研究者番号：50299286

研究成果の概要（和文）：本研究では、ブッシュ共和党政権の成立とともに加速的に階層化されたアメリカ社会の底辺に置かれた人々が発信するサブカルチャーに注目し、抑圧された人々のアイデンティティ構築の過程を明らかにするとともに、格差社会の実情に照らし合わせながら、階層を超越する、ことにアフリカ系アメリカ人のサブカルチャーを論じる理論構築の可能性を明らかにした。また、サブカルチャー表象の研究が、グローバル化によって進む環境破壊問題を論じる際にも有効であることを示した。

研究成果の概要（英文）：In this research project, which focuses on the subculture of those at the lowest level of America's stratified society, the possibility of theorizing the discourse of transcending class is explored through a close examination of the African American subculture in particular. Moreover, it is speculated that the analysis of subculture in mainstream American society could serve as a significantly important tool for examining the ecological destruction in the globalized world.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文化

キーワード：英米文学、階級、ジェンダー、多文化主義

1. 研究開始当初の背景

アメリカは民主主義国家の象徴的存在ではあるが、その建国時から格差社会が存在する。

「独立宣言」（1776）には、人間としての基本的権利が明文化され、民主主義の根幹をなす、人民がすべて平等だとする理念が示されているが、この「すべて」の人々には、アフリ

カ系アメリカ人やアメリカ先住民族、女性は含まれていなかった。1964 年の公民権法の制定により、ようやく人種、性別に関わりなくすべての人々に公民権が認められたが、同法執行後も、アメリカの階層社会に人種の壁を越える変革がもたらされたわけではない。アメリカ主流社会では、アフリカ系アメリカ人は社会的弱者としてみなされてきたが、彼

らは音楽や映像などのサブカルチャーのジャンルにおいて主体性の回復を積極的に試み、格差社会を乗り越える文化の可能性を模索している。プリンストン大学教授のコーネル・ウエストは非暴力の視点から人種問題についてアカデミックな立場で発言する一方、アフリカ系アメリカ人の音楽の伝統を踏襲しながら、彼らの歴史を見直し、ブッシュ政権のイラク攻撃や資本家優先のグローバリゼーション政策を批判するラップ音楽のCD、*Never Forget: A journey of Revelations*を製作している。また、映画監督スパイク・リーは、2005年9月にニューオーリンズを襲った巨大ハリケーン「カトリーナ」をテーマに、被災者の救援の遅れに潜むアメリカの人種差別を鋭く指摘するドキュメンタリー映画 *When the Levees Broke: A Requiem in Four Acts* (2006)を発表した。このような音楽や映画は、アメリカの格差社会が孕む人種差別の危険を鋭く描き出しており、サブカルチャー研究のための重要な研究資料となっている。

これらの研究資料をもとに、アメリカ社会に巣食う根深い人種差別・格差社会問題を読み解くために、アメリカの格差社会とサブカルチャーの関連性についての研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究では、「アメリカ格差社会とアフリカ系アメリカ人のサブカルチャー」をテーマに、自由と平等を謳う民主主義を標榜するアメリカにおける格差社会の問題について、社会的弱者とされるマイノリティ・グループ、ことにアフリカ系アメリカ人の視点から、彼らが発信する、権威主義に対抗するサブカルチャーとしての文化表象を検証する。そして、一部の特権階級が産み出す排他的な単一文化に代わって、多様性を尊重し、共生をめざす文化理論を展開することを目的とする。

3. 研究の方法

「アメリカ格差社会とアフリカ系アメリカ人のサブカルチャー」というテーマのもと、アフリカ系アメリカ人の対抗文化としてのサブカルチャーの研究を行うために、映像、音楽などのジャンル別に研究を行う。またアメリカでリサーチを実施し、格差社会の実情に照らし合わせながら、階層を超越するアフリカ系アメリカ人のサブカルチャーを論じる理論構築を行う。

(1) 政治批判と映像に関するサブカルチャーの考察

公民権運動以降、アフリカ系アメリカ人監督によるアフリカ系アメリカ人を主体とする映画製作が活発になる。アフリカ系アメリ

カ映画を代表する監督スパイク・リーは、人種差別が蔓延するアメリカ社会の問題、また、その問題を放置するアメリカ政府の対応を批判する映画を製作してきた。スパイク・リーの映画を含め、アフリカ系アメリカ人監督による映画、また映画批評を研究し、映像におけるアフリカ系アメリカ人と格差社会の問題について調査する計画である。

(2) 差異を超越する音楽に関するサブカルチャーの考察

アフリカ系アメリカ人のサブカルチャーのジャンルに入る音楽の中でも、特にゴスペル音楽に焦点を当てて研究を行う。ゴスペル音楽は、アフリカからアメリカに連行され、母語、祖先から伝わる文化、宗教を奪われた奴隷たちが、救いをもたらすとするゴスペル（福音）を白人に強制されたキリスト教の中に見出し、キリスト教へ帰依し、神に賛美をささげる一方で、アフリカ系アメリカ人の人々のあいだで先祖代々受け継がれてきたアフリカにルーツを持つ音楽を取り入れて発展したもので、現在では階級差を超越したジャンルとして注目されている。これらの音楽を通して格差社会の問題を考察する。

(3) 総括—サブカルチャーとしてのアフリカ系アメリカ人の文化表象—

研究の総括として、応募者が所属する学会（黒人研究会、多民族学会、アメリカ文学会等）でシンポジウムを企画し、格差社会とサブカルチャーに関する議論の場を持つ。さらに、指導にあっている大学院生を学会に引率し、次世代の研究者にも本研究テーマであるところの「アメリカ格差社会とサブカルチャー」の意義について直に学ぶ機会を提供したいと考えている。

4. 研究成果

(1) 政治批判と映像に関するサブカルチャーの考察

① 1980年代の終わり頃から21世紀初頭にかけて、アフリカ系アメリカ人の文学と文化に大きな影響を与えたポスト・ソウル美学に着目した。ポスト・ソウル美学の担い手は、公民権運動の時代に成長し、人種差別撤廃後の大きな変化の時代を生きてきた人々である。この世代の作家の1人、テリー・マクミランは、文学のジャンルばかりではなく映画のジャンルにも進出して成功している。マクミランの代表作、*Waiting to Exhale*(1992)は、高等教育を受ける機会に恵まれた中産階級に属するアフリカ系アメリカ人女性の自立と友情を描いている。この作品は、1995年には映画化され、人種や階級の違いを超越して多くの

人々を魅了している。ジャンル、人種、そして階級差を越えたマクミランの世界で描かれる文化表象を検証することで、公民権運動までは人種で固定化されていたアメリカの階級社会を再検討した。さらに、自伝的要素が強いといわれている『ママ』に焦点を当て、彼女の経歴と照らし合わせながらマクミランが成長した時代のアメリカ社会と階級の問題を検証し、その成果を「テリー・マクミランの『ママ』と「ソウル」の継承」という論文に発表した。

- ② アフリカ系アメリカ人の作家トニ・モリスンの第5作目の小説にあたる『ビラヴィッド』と、この作品が、アメリカの人気テレビ番組司会者、オプラ・ウィンフリーによって映画化され、さらには作者自身の手でオペラ化され、ビデオやDVDで広く一般に普及していることの意義を考察した。実際に起こった女奴隷(マーガレット・ガーナー)の子殺し事件をもとにしたこの作品は、奴隷制を容認したアメリカの政治に対する批判を展開しており、小説、映画、オペラというそれぞれ異なったメディアを用いて、人種、年齢、階級の差を越えて幅広い層の読者、観客に人種問題について再考を促す契機となっていることを証明した。その成果を、『メディアと文学が表象するアメリカ』に「トニ・モリソンとマーガレット・ガーナー物語—小説および映画『ビラヴィッド』からオペラ『マーガレット・ガーナー』にいたるまで—」という論題で発表した。
- ③ トニ・モリスンの最新作、『マーシー』を取り上げ、人種がヒエラルキーを構築してきたアメリカの歴史を踏まえて、「人種が問題とはならない」スペースを構築しようと目論む作者の手法について考察した。17世紀末のアメリカ植民地を舞台に展開するこの物語において、人種を問わず人々が差別や抑圧、支配と葛藤する姿を通して、モリスンが提唱する「人種が問題とはならない」スペース構築の意義を、インターレイシャルな視点を入れて検討した。その成果を、第48回日本アメリカ文学会全国大会シンポジウムにおいて、「アフリカ系アメリカ人文学に見るインターレイシャリズム」というタイトルで発表した。

(2) 差異を超越する音楽に関するサブカルチャーの考察

- ① 1980年代の終わり頃から21世紀初頭にかけて、アフリカン・アメリカンの文学と文化に大きな影響を与えたポスト・ソウル美学に着目した。テリー・マクミランと同様、この世代を代表する作家の一人、コルソン・ホワイトヘッドを取り上げ、彼の半自伝的小説と言われる『サグ・ハーバー』

(2009)を中心に、彼のエッセイ等も参照しながら考察を行なった。ホワイトヘッドは、ニューヨークのマンハッタンで生まれ育ち、白人が圧倒的多数を占めるプレップスクールで学び、ハーバード大学を卒業した後、「ヴィレッジヴォイス」で書評や、テレビ、音楽の批評を担当した経験を持ち、また、ニューヨークに住み続け、アーバンポップカルチャーに対する関するコメンテーターでもある。ホワイトヘッドは、『ニューヨーク・タイムズ』紙に掲載された記事で、階級や人種を超えて、一般市民を巻き込んで人種の問題を考えるには、ポップカルチャーが最適だと述べている。ホワイトヘッドの言説を読み解き、人種、階級差を超える手段として、マイノリティ・グループが発信する映画や音楽などのサブカルチャーが重要であることを証明した。この研究成果は、第49回日本アメリカ文学会全国大会におけるワークショップにおいて、「ポスト・ソウル美学」というタイトルで発表した。

- ② グローバル化時代における自然破壊と階級格差の問題について検討した。資本家によって発展途上国の資源や労働力が搾取されるグローバリゼーションの時代にあつて、社会で周縁化されてきたアフリカ系アメリカ人の闘いの手法が昨今、注目されている。周縁化されてきたマイノリティの人々と同様、沈黙を強いられ、搾取されてきた自然の表象について、トニ・モリスンの『マーシー』を中心に研究を行い、その成果をパリで開催された第6回トニ・モリソン学会で、“Conquest of Nature and Establishment of Racial Hierarchy in *A Mercy*” というタイトルで発表した。

(3) 総括—サブカルチャーとしてのアフリカ系アメリカ人の文化表象—

- ① これまでの研究成果を踏まえ、奴隷制の時代からオバマ大統領誕生にいたるポストレイシャルの時代までのアフリカ系アメリカ人の音楽がもたらした社会的影響について、人種、階級の視点から論じた。その研究成果の公表として、2011年6月に山口大学で開催された中四国アメリカ文学会支部第40回大会でのシンポジウム「アメリカ文学と音楽」において、アフリカ系アメリカ人の音楽・文学に見る人種意識の変遷—ポスト・ソウル世代の作家、コルソン・ホワイトヘッドの『サグ・ハーバー』を中心に」というタイトルで発題した。さらに、2011年度(第29回)広島女学院大学公開セミナー第2回で「アフリカ系アメリカ人の音楽・文学を通して見る人種意識」をテーマに講演を行ない、科学研究費補助金による研究成果を、地域社会に公

表する機会とした。なお、これらの発表、講演をもとに、「アフリカ系アメリカ人の音楽・文学に見る人種意識の変遷—奴隷制からポスト・ソウル世代にいたるまで—」という論文を執筆し、『ことばが語るもの』に収録された。本論では、公民権運動以降に生まれた語り手ベンジーと、人種隔離された社会で苦勞して高等教育を受けた父親とのあいだに存在する人種意識の違いを比較し、この作品の背景に流れる音楽の意味を読み解きながら、アメリカ社会における人種意識の変遷を考察した。また、ホワイトヘッドが、さまざまなエスニックグループが文化を発信できる状況をめざし、作家活動を行なっていることを示した。

- ② ジョンズ・ホプキンス大学から出版されている、文学理論を専門とする米国の季刊研究誌『ニュー・リテラリー・ヒストリー』(New Literary History)、http://muse.jhu.edu/journals/new_literary_history/の翻訳チームに加わり、Karyn Ball 著 “Primal Revenge and Other Anthro-pomorphic Projections for Literary History” (New Literary History 39.3, Summer 2008 所収) の共同訳に携わった。その成果は、「文学史のための原初の自然の逆襲と、他の擬人化された投影」というタイトルで、『世界文学史はいかにして可能か』の中に収められている。この論文は、人間による自然界の「植民地化」を問題としている。2007年にドイツのカッセルにある博物館で展示された剥製の「キリン」をグループバージョンと自然破壊の視点から読み解き、また、アルフレッド・ヒッチコック監督の映画、『鳥』を取り上げ、人間による環境破壊が深刻な問題となっている状況にあつて、自然が人間に逆襲をする日が近いことを警告している。
- ③ これまでの研究の集大成として、人種差別や性差別、階級差別をエコロジーの問題と繋げて論じる論文、“Reclaiming the Presence of the Marginalized: Silence, Violence and Nature in *Paradise*” を著わし、Rice University 名誉准教授、Lucille P. Fultz 氏が編集者として企画した研究書、*Toni Morrison: Paradise, Love, a Mercy* (Contemporary North American Fiction) に収録される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

森 あおい: 「テリー・マクミランの『ママ』と「ソウル」の継承」(特集: ポスト・ソウルの黒人文化)、『水声通信』 29, 査読有, 2009. 134-143.

〔学会発表〕(計4件)

- ① 「アフリカ系アメリカ人の音楽・文学に見る人種意識の変遷—ポスト・ソウル世代の作家、コルソン・ホワイトヘッドの『サグ・ハーバー』を中心に—」 中・四国アメリカ文学会第40回大会シンポジウム 2011年6月12日 於山口大学
- ② “Establishment of Racial Hierarchy and Conquest of Nature in *A Mercy*” The Sixth Toni Morrison Society Conference 2010年11月 於仏国パリ
- ③ 「ポスト・ソウル美学」 第49回日本アメリカ文学会全国大会ワークショップ 2010年10月 於立正大学
- ④ 「アフリカ系アメリカ人文学に見るインターレイシャリズム」 第48回日本アメリカ文学会全国大会シンポジウム 2009年10月 於秋田大学

〔図書〕(計3件)

- ① Lucile Fultz, Aoi Mori, et al: *Toni Morrison: Paradise, Love, a Mercy* (Contemporary North American Fiction), “Reclaiming the Presence of the Marginalized: Silence, Violence and Nature in *Paradise*,” London, Continuum. (2012年12月出版予定)
- ② 米倉 綽、森 あおい、他6名: 『ことばが語るもの』、「アフリカ系アメリカ人の音楽・文学に見る人種意識の変遷—W. E. B. デュボイスからポスト・ソウル世代のコルソン・ホワイトヘッドにいたるまで—」、英宝社、2012、87-110.
- ③ 山下 昇、森 あおい、他13名: 『メディアと文学が表象するアメリカ』、「トニ・モリスンとマーガレット・ガーナー物語—小説および映画『ピラヴィッド』からオペラ『マーガレット・ガーナー』にいたるまで—」、英宝社 2009、247-270頁.

〔その他〕(計4件)

公開講座

森 あおい 「アフリカ系アメリカ人の音楽・文学を通して見る人種意識」 広島女学院大学第29回公開セミナー(「言語と文化の多様性」) 2011年10月15日 於広島女学院大学

翻訳

森 あおい、宮本敬子：『世界文学史はいかにして可能か』、「文学史のための原初の自然の逆襲と、他の擬人化された投影」(*New Literary History* 39.3. Summer 2008 所収、Karyn Ball 著 “Primal Revenge and Other Anthropomorphic Projections for Literary History” の翻訳)、成美堂、2011、97-143.

書評

森 あおい：「人種の違いを超えた他者への哀れみの心、愛、思いやりを描く— 人種概念が固定化される過程により、差別の根拠を問う」(トニ・モリスン著、大社淑子訳『マーシィ』の書評)、『図書新聞』、2010、6.

プロシーディング

Aoi Mori: “Literature and Culture Workshop I: Summary and Discussion.” *Nanzan Review of American Studies: Journal of the Center for American Studies* 31 (2009): 201-203.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 あおい (MORI AOI)

広島女学院大学・文学部英米言語文化
学科・教授

研究者番号：50299286